

みんなが自分らしく

守山南中学校二年 種野 友南

いをしているならそのままにするのは良くないのではないか、と考

えた。

私たちの生活の中には、「男だから」「女だから」という昔からの考え方や習慣が当たり前のように存在している。学校で行われる席替えや、体育の授業など、身近な場面で「男」か「女」のどちらかしかない場合が多く、また、「男の子だから女の子を好きになる」「女の子だからピンクが好き」などの偏見など、みんなが気にしていない、気づいていないところで誰かを傷つけているかもしれない。私が去年受けた英検の受験申し込みの際にも、「性別」を選ぶ欄が「男」か「女」の二つしかなかつた。

世の中には、どちらの性別にも完全には当てはまらない人、あるいは自分の性別を他人に言いたくない人、両方の性別を好きになる人など、様々な性的指向・性自認の人がいる。私もそのうちの一人である。だから、形式的なことかもしれないが、その二つの選択肢しかないという事実に、私は強い不快感を覚えた。試験を受けるだけで「男」か「女」かを強制的に決めさせられるのは、無用なストレスを与えられる。また、本人の実力を評価するはずの試験で、性別が必要なはずがない。

ジエンダー差別は、悪意のある行為ではなく、こうした社会のルールや制度の中に潜んでいることが多い。誰も悪意は持っていないなくても、「昔からそうだから」といった理由で見直されない結果、見えないとこで人を傷つけてしまう。実際、海外では「男性・女性・その他」といった選択肢を用意する場面が増えていたり、同性婚も認められていたりする。日本でも、少しずつその動きが広がっているが、まだ十分とは言えずまだ誰かを傷つけてしまうかもしれない部分があると思う。

制度におかしいところ、誰かを傷つけるかもしれないところがあると気づいたとき、それをすぐに直すことは難しいかもしれない。しかし、まず気づくことや誰かの気持ちを考えることはできる。私自身も、これまで当たり前だと思っていた仕組みが誰かを困らせていないか、傷つけていないか立ち止まって考えるようになった。自分とは立場の違う人を想像し、どうすれば誰もが安心して生活できるかを考えることは、ジエンダー差別だけでなく、世界中にある差別をなくすための最初の一歩だと思う。

社会は、多くの人の「当たり前」が積み重なつてできている。だからこそ、その「当たり前」が誰かを排除していないかを考えながら、少しづつ変えていく必要がある。性別に縛られず、誰もが自分らしく生きていける社会をつくるために、私はこれからも身の回りの違和感を見逃さず、より良い選択を考えていきたい。

ようになつた。自分はスルーできても、誰かが心の中でしんどい思う